

セッション F 「社会思想におけるリプロダクション」 報告書

世話人：後藤浩子（法政大学・会員）

報告者：小島優子（高知大学・非会員）、石川伊織（新潟県立大学・非会員）

討論者：野尻英一（大阪大学：会員）、後藤浩子

本セッションでは、「ヘーゲルの女性論：アンティゴネと二人のマリア」と題して、従来アンティゴネだけが突出した形で論じられてきたヘーゲルの女性論の視点を修正し、彼が1820年代に『美学講義』で言及している聖母マリアとマグダラのマリアをも対象に入れた場合に、その女性論はどのような意味を持つのか、自然哲学と精神哲学の関係を含め検討された。

小島氏による第一報告「ヘーゲルにおける生と死の継承—『アンティゴネ』をめぐって」では、『精神現象学』と『法哲学』に基づいて、ヘーゲルが女性の役割として位置づけている埋葬の意味が検討された。埋葬はヘーゲルにとって自然的存在としての死を精神的なものにする行為であり、具体的には死者を家族という精神的共同体の中の一員とするものである。また『法哲学』においてヘーゲルは、生殖による生も死と同様、家神ペナーテースによる精神の運動として捉えるべきであるとしている。つまり、婚姻による生殖は、家神という精神に義務を負って、対立しあう異なる二項（二つの人格）が子供という実体的現存在のなかに統一を現実化させることと解される。そして、この家神の精神を担うものこそ女性なのである。この家神という精神に基づく共同体の根底には「地」の共同体がある。一方、『自然哲学』では、生殖は類が自己存続する活動、具体的には、「能動的な感情と膨らんだ心臓」である男性と「受容的なもの」であり「未展開の統一」である女性という区別の揚棄と捉えられている。そこでの男性と女性の区別は生物学的機能に則ったものと考えられる。

石川氏による第二報告「二人のマリア—ヘーゲル美学講義におけるリプロダクションの問題」では、ヘーゲルが言及している絵画の画像展示とともにマリアについての言及が紹介された。絵画論では聖母マリアもマグダラのマリアも生殖や性愛を超えた兄弟姉妹と同等のものであり、宗教的な愛の具現者として扱われている。この宗教的な愛の人間化が愛の最高の固有な形式である母の愛である。この愛とは「古代の自立的な個性性に打ち勝った主観態」であり、自らの否定の力によって自らを保持し、普遍的なものへと広がっていくものであり、それは「喪の悲しみや苦痛」や「来るべき喪失を前にした憂慮」のうちに潜んでいる。この意味で、子を喪失した受苦の中にあるが自己の個性性から抜け出せないニオベーとは異なる。マリアは死によって愛する者を失うが、失われたものを維持し、これによって魂は自分自身のなかへと帰る。人々は、瀕死のマリアを見舞いに來て、この光景を記憶させられる。「宗教的な愛の本質が子である」ということは、すなわち「死」こそ愛の本質であり、そこに「磔刑図」から『キリスト降架図』、『ピエタ像』、そして『聖母マリアの変容』と『瀕死のマリア』に至る精神の運動があるということに他ならない。そして、この愛を体現するマリアもアンティゴネも女性であるが生殖からは切り離された女性である。

以上の二つの報告に対し、野尻会員から、ヘーゲルの生命論の視点からのコメントが出された。ヘーゲル哲学は反自然主義とされているが、自然と精神の両プロセスの接点として「地」のエレメントがある。ヘーゲルの叙述を集めてイメージを形成すると「地」は、理性の外、精神の内にある非自然的、非理性的、非意識的、女性的なものといえる。ヘーゲルにおいて観察される有機体という現象は、精神の構造の外界への投射として解釈できるが、それは非理性的なものをも含む投射である。理性による類の区分と体系化は、地という「普遍的な個体」によって否定される。一方で、埋葬という意識の運動を血縁がつけ加えることによって死者が被っていた自然の威力の業が中断され、死者は始原的な不滅の個性である地の共同体へと戻される。こうして血縁者は抽象的な自然の運動を補完することになるという。精神におけるエレメントとして、火のエレメント＝精神（全体）、風のエレメント＝共同体（持続するもの）、水のエレメント＝家族（犠牲に供するもの）をヘーゲルが論じている箇所があるが、この外に、第四のエレメント、つまり自然との接点としての「地」があり、この第四のエレメントに近い精神のタイプとしてヘーゲルは「女性」を捉えていると思われる。

また後藤会員からは、ヘーゲルにおいて女性は共同体形成の最初の契機として捉えられているが、そこで形成される共同体は、ギリシャ人倫、法状態、そして宗教へと精神が展開するにつれ、婚姻と生殖の精神である家神ペナーテースへの義務に基づいた家族という個別性を揚棄して、人類一般（類）という普遍性を獲得し、地の共同体から天の共同体へと変化すると読むことができないかという問いが出された。

その後、フロアから、ヘーゲルにおける「女性」と生物学的な性別との関係について質問が出された。アンティゴネもマリアも精神性として「女性的なもの」を具現しているというのが登壇者の総じての見解だった。野尻会員からは、そのような精神性が「女性」という言葉で表現されている以上、いまだ生物学的なものから派生した男女の対の枠組みの中での思考であるという限界も指摘しうるが、ヘーゲルの有していた精神主義（反自然主義）のベクトルを現代的に解釈し延長することで、むしろそれを生物学的な性差と切り離れた精神タイプとして取り出す可能性も併存すると意見が述べられた。

ヘーゲルによれば、女性的な精神は、育て・労り・看取ることを介して、すなわち生と死を介して家族を超えた共同体を形成する。ここには、経済的な利潤と効率を目指す近代資本主義とは異なる共同体の可能性が示されている。ヘーゲルがヨース・ファン・クレーフェの描く二点の『マリアの死』を通して主張するのは、そうした共同体である。とはいえ、女性的な精神と女性の身体とを切り離すことができないのが19世紀の限界であってみれば、これが固定的な性別役割と紙一重であることは当然であろう。しかし、女性的な精神を持つ者が必ずしも女性の身体をしている必要がないとすれば、ここには資本主義的近代を超える別種の主体の在り方が示されている、と考えることもできるだろう。